

大阪市立東洋陶磁美術館



友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.8

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06(223)0055

美術館の舞台裏(5)

美術館の仕事のうち、大きな割合を占めるのが展示事業です。むしろ展示という仕事があれば、美術館は研究所か、宝物庫になってしまうでしょう。その展示事業は、企画の内容によって左右されます。学芸員は年がら年中、どのような企画を立てるかで頭が一杯になるわけです。ある美術館の館長は、そうした事情をふまえて、美術館の仕事の本質的な部分は「ファンカイ屋」とも呼べるものだ、といったことがあります。つまり、展覧会屋という意味です。ただアパートや催会場で開かれる展覧会と異なるのは、恒久的な施設で、長期にわたる綿密な調査研究活動の上で、非営利的に行う事業ということになるでしょう。

企画の立案は、テーマの設定から始まります。何を、どのように訴えて展開するか。テーマとしては面白くても、実現が不可能なものなら意味がありません。アンドレ・マルロは、かつて「空想の美術館」という書物を著したことがありますが、貴重な美術品を拝借することは、現実的にはなかなか困難な問題が多いのです。テーマの設定は、あくまで、展示する美術品が借用できるかどうか、その可能性を組み合わせさせて進めなければなりません。テーマに相応しい展示の対象として何を選ぶか、その選んだものの担当は誰か、借用の可能性はあるか、といった情報が必要ということになります。学芸員としての能力には、こうした情報の質と量が問われます。今はやりの言葉でいうと、美術館の展示事業も、情報産業の一端を担っているということでしょう。

ただ、今述べてきたことは、あくまで美術館の自主企画のことで、場合によっては、他館や他のプロモーターが立てた企画をそのまま流用することもあります。その場合は美術館は、単なる貸会場のような性格を持つことになります。

大阪市立東洋陶磁美術館
館長 伊藤 郁太郎

お知らせ

第7回講演会を下記の如く開催致します。

日 時：昭和62年7月4日(土)
午後1時半～午後3時半
(受付は午後1時より開始します)

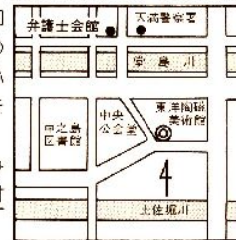
場・所：大阪弁護士会館・6階大会議室

講 師：尹 龍二氏

演 題：「高麗青磁の編年」(仮題)

※ 尹龍二氏は、現在、韓国国立中央博物館学芸室長・鄭良謨氏に次ぐ韓国陶磁史の研究家であり、同光太学校の歴史科副教授を勤めている。おそらく高麗・李朝陶磁の窯址の調査実績にかけてはこの人の右に出る人はいないと思われる。特に最近、高麗陶磁の編年について、新しい見解を打ち出しており、注目されている。「朝鮮時代分院の変遷についての研究」(1979年)など、重要な論文が多い。

※ 夏の講演会は冷房完備の場所で開催してほしいという会員の皆様の御要望が多数ございましたので、今回は会場を弁護士会館に変更致します。美術館のすぐ近くですので、足非御出立下さい。尚、講演会の受付で会員証を提示していただきますので、会員証をお忘れなく御持参下さい。講演会当日に継続の申込みをされる方は、美術館受付でお申出下さい。



はほぼ12世紀末から14世紀初頭までではないか。というのは、吉州窯の鉄絵の瓶が、韓国・新安沖引上遺物の中に1点あり、一緒に発見された木札の1323年という年号からはほぼ同じ頃の作品と考えられ、13～14世紀という時期がおさえられる訳です。中国では、磁州窯の鉄絵技法が、吉州窯へ伝わったという説が有力で、これは北宋末期に北方の侵入者から逃れて南下した人達が、南宋の時代に活躍したという考え方と結びつくものです。確かに似た感じの文様があるので或はそういう可能性もあるかもしれません。また、江西省の鉄絵は元の青花の文様によく似ており、私はおそらく鉄絵の技術が下地にあり、コバルトの使用が発見された時点で、鉄をコバルトに置きかえて染付が始まるのだらうと考えるのですが、染付の起源とある程度関わっていると見て間違いないでしょう。以上のように北方の磁州窯系の鉄絵の場合は宋以降、技術的には近代まで続くのに対し、南方では元のある時期に姿を消し、後を青花に譲るようです。

以上のように中国の鉄絵を考えた場合、釉下彩の一番安定した手法がこの鉄絵であると言えます。他の、例えば銅は、果敢だり、色がとんだりしがちで、釉下彩の絵具としては非常に不安定で、むしろコバルトの方が遙かに安定した顔料です。それ以上に鉄の方が身近で、扱い易い材料であったため、まず鉄絵が広範囲で多様に展開をしたのでありましょう。その場合濃淡表現に向かないという鉄絵具の性質上、線描きや塗り潰しなどによる非常にはっきりした文様になります。染付には色の濃淡による細かい文様が早くからありますが、鉄絵ではその例は非常に稀で、シルエット風や線描きの手法ではっきりした文様が描かれます。鉄絵の白と黒は非常にくっきりとしたタンな感じですが、染付に比べると、文様に幅がない。また白磁は磁器の一つの頂点であり、ブルーの文様もそれにふさわしい色合いな訳で、それが現在に至るまで青花が釉下彩磁の中心であり続けられた理由でありましょう。部分的に鉄絵具の装飾をもつものは、志野、唐津、タイやベトナム、高麗の鉄絵、李朝の鉄磁などがありますので、技術的には使いやすい材料だったでしょうが、しかしやはり幅が広くないためにそれ以上の展開をみることなく、青花にとって代わられることになったのではないかと考えております。

(この後、スライドを使って、個々の作品を通じて詳細な解説がなされました)

注：写真は下記の音書より転載しました。

「日朝陶磁全集」12・13(小字磁)、「近年発見の窯址出土中国陶磁展」(出光美術館)

(文責：友の会事務局)

プロフィール

長谷部 楽爾 氏



1928年(昭和3年)生まれ。東京大学文学部美学美術史学専攻卒業。文化財保護委員会美術工芸課を経て、現在東京国立博物館嘱託。東京陶磁史を研究。主な著書に「講義美術 陶芸」(原色日本の美術30、小学館)、「陶磁講座 陶磁1」(高麗(花山朝))、「高麗の青磁」(陶磁大系23、平凡社)ほか。

編集後記

7月より友の会も3年目に入りよす。新しい会員証は、秋に開催予定の開館5周年記念「李朝陶磁500年の美展」(仮称)にちなんで、李朝の「青花草花文壺」です。清楚な文様をどうぞお楽しみ下さい。(〇)

◆第6回講演会要旨◆

「中国の青磁鉄絵について」

日時：昭和62年3月7日(日) 午後1時半～3時半
 会場：大阪市立東洋陶磁美術館 講堂
 講師：東京国立博物館 次長 長谷部 楽爾氏

現在開催中の高麗の鉄絵鉄彩展に因み、中国の鉄絵についてお話し致します。

陶磁器に鉄を使って色をつけることは、古くからあり、これには釉と絵具、即ち鉄釉と鉄絵具とがあります。鉄というのは、やきものを作る上で、良くも悪くも働く。例えば白磁を焼く場合、鉄分が入ると色が濁るため、それを極力排除する努力が必要になります。しかしどうしても取りきれない場合、黄味や青味を帯び、それが各地の白磁の特徴になる訳です。青磁の場合も同様に鉄分の量により、様々な色合いが出ます。従って釉や生地にとって、鉄分は非常に微妙な存在です。しかし同時に、やきものの性質を特徴付ける働きもする訳です。特に絵具としての鉄は、黄色や褐色の絵具、青磁釉、赤の上絵具など実に多様な変化をみせます。この鉄分を絵具として一番単純な形で用いたのが鉄絵です。

やきものの装飾は、例えば日本の縄文土器にも見られるように初期のものは、彫刻・貼花・型押など素地に装飾をつけるという形で行われてきています。やがて釉の出現を見るようになりますが、その場合も、初めのうちは素地に付ける文様というものが主力です。次第に釉の色合いとが、数種類の釉のかけ合わせへと発展してまいります。例えば漢時代の緑釉、褐釉などの鉛釉で始まり、三彩という一つの完成された形が唐代に出来上ります。一方では、釉の上や下に文様を描くことが、ある時期から始まり、鉄絵もこの部類に入る訳です。生地を純白にして、それに透明釉を掛けることによって白磁が出来上りますが、釉下に文様を描くことは、白磁の完成により可能になってまいります。それはほぼ6世紀頃と考えていいでしょう。鉄が一番発色させやすい金属であることを考えると、同じ頃に鉄を使った文様が始まってよさそうなのですが、実際には鉄絵具よりもむしろ黒い釉が、ずっと早く青磁と同じ頃に出てくるようです。青磁の釉は微量の鉄分により発色しますが、その分量を増やしていくと褐色から黒に近いその最たるものが黒釉だと思われまふ。即ち、顔料としての最初の金属が鉄であり、それをを用いた最初の色釉が黒釉でありまふ。例えば、古越磁の場合、青磁の発色が美しい色合いになかなか出来上らないの比べ、黒釉は、最初から濃い真黒な釉として完成された形で出てまいります。このこと

から黒釉というのは、案内色のあるやきもの原点なのかもしれないという気がしてまいります。白磁が完成した段階では、釉下にその黒釉を用いて簡単な装飾が行われることがあります。この場合、装飾部分は際立っておりまふ。この手の遺品は少ないものです。

実際に釉下に絵具を使つての文様は、唐時代の遅い時期(9世紀頃)の湖南省・長沙の青磁鉄絵が最初だと考えら

れています。絵具として鉄だけでなく銅も使い、褐色と緑色の2色を使い分けて、鳥・人物・花・動物等の文様を水注の胴部や盤の内面に描き、かなり完成されたものになっています。類品は同時期に四川省で僅かに作られた位で多くはなく、長沙の鉄絵或いは彩画として有名なものです。ただこの種の作品には成分の問題が、または文様を描く際の技法的な問題がわかりませ



Fig.1 青磁鉄絵童子水注

んが、表面が少し凹んだり、ガサガサした感じに出来上り、後の鉄絵とは少し違った雰囲気があります。いずれにしても9世紀の早い段階に釉下に絵具を施した青磁鉄絵が行われた訳です。しかしこの技法も10世紀の前半頃から作られないようになります。この時期には、長沙窯の系統と言えるかどうかわかりませんが、越州窯でも青磁鉄絵がごく少量焼かれていることが最近の発掘調査でわかってまいりました。当時の浙江省北部の呉越国の支配者・錢氏一族の墳墓から、青磁鉄絵が青磁に混ざって少量出てまいります。この場合には、青磁の釉下に鉄絵を施し装飾すること、何か特別の意味があったのかも知れませぬ。中国では、長沙の鉄絵との関係が注目されていますが、確証はないようです。ところで青磁と鉄絵の関係については、三国・南朝の時期の古越磁に、その前兆を見ることができると言えまふ。初期には、器の上に何かをのせる、或いは支えるために土をのせて焼き上げる。焼成後、そこに含まれる鉄分により斑点として残る。それが次第に装飾化され、意図的に壺の肩などにつけられるようになる。これが今日遺例として見ることの出来る鉄斑文の青磁です。その鉄斑が次第に洗練され、特別な状態で表われてまいりますのが、10世紀頃の青磁鉄絵と考えられるのではないのでしょうか。そして越州窯系統のやきものが中国の南の方に伝播するにつれて鉄絵の手法も伝わっていったと考えられます。といまふのも、越州窯系統の龍泉窯や、11世紀か12世紀頃の広東周辺のやきものなどの中に、鉄絵具の装飾がみられますし、それ以外にも各地で少しずつ鉄絵のものが出てまいります。従って、起源としては唐末ぐらいに長沙、或いは越州窯で始まった鉄絵が、およそ12世紀から14世紀頃には南部の各地で盛んに作られるようになります。

北の方では、河北省の磁州を中心として磁州窯系のやきもの

が、華北の非常に広い地域で随分やかれていきます。これは、生地に白泥を流しかけてその上を鉄絵具で装飾し、透明な釉をかけて焼くものです。白泥による白地と鉄絵具の装飾が結びつき、金・元時代に非常に華やかな展開を見せます。

一方南の方で最初に注目されたのは、広州市郊外の皇帝岡という丘の宋代の窯で、青磁、白磁などの出土品の中に混ざって青磁鉄絵がありました。私共の博物館に、それと類似した東南アジア渡来の牡丹文大皿があります。この皿の類品が、広州西村の窯跡で発見されたことで、広東でも鉄絵を宋代に盛んに焼いたことが判つてきました。

次に数年前ですが、福建省の泉州市郊外の童子山付近で、鉄絵を焼いた窯が発見されました。今は「磁窯窯」と呼ばれています。この窯の作品はソウルの博物館の蛸の文様の大皿に代表されるものです。

以前私共の館の「日本出土の中国陶磁展」の際に展示した、各地出土の中国陶磁片の中にも、この手の鉄絵が何点ありました。また、いわゆる影青系統の中にも花文などの簡単な鉄絵文様があり、これも器形等から考えまふと福建省でありまふ。

もう一つ重要な窯が江西省の吉州窯で、実に見事な鉄絵を焼いています。1930年代に英国の研究者、ブランクストンが、永和鎮の吉州窯々址で、鉄絵文様の破片を採集し、報告しました。それと同じ手法で、全体に鉄絵文様がびっしり描かれた大形の花瓶が、大英博物館にあります。特に波文については、元の青花の波文に近い雰囲気があります。

当時はまだ、元の青花を吉州窯に結びつけはしませんでした。少なくとも大英博物館の花瓶は、吉州窯のものであると、確か1938年に発表しています。新中国建国後、1950年代頃には、吉州窯々址を調査した中国人が、小冊子の報告を出し、その中には興味深い資料が多くみられます。吉州窯の破片はその後、日本や東南アジアなどでも多数出土することが判つてまいりました。最初に私が見たのは、広島県の草戸干軒遺跡出土の陶片です。当初は磁州窯の鉄絵と混同されていましたが、最近では各地で多数の破片が発見されています。吉州窯では、ある時期このように大量に鉄絵をやいた。時代が明らかで最も古いものは、12世紀末の年号のある墳墓から出土した鹿文様の小壺です。これを基準に考えまふと、鉄絵の製作

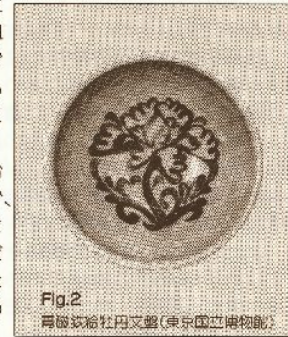


Fig.2 青磁鉄絵牡丹文盤(東京国立博物館)

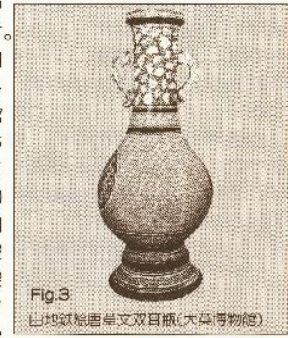


Fig.3 白地鉄絵蓮華文双耳瓶(大英博物館)